

スウェーデンの教員から多忙化解消策と実践的英語力を高める指導法を学ぶ

静岡県立浜松湖南高等学校 教諭 竹内 睦子

研修の目的

スウェーデンの生徒や教員との交流をきっかけに、両国の教員の勤務体制、英語教育に大きな違いがあることを知った。働き方改革、英語教育改革が叫ばれる今、スウェーデンの学校を訪問し、現地の教員から多忙化解消策と実践的英語力を高める指導法を学ぶことを決めた。

日本との違い

スウェーデンの公立高校2校、市が運営している成人向け学校1校を訪問し、教員の業務内容や英語の指導について話を聞いた。ここにその一部を紹介する。まず、学校行事について述べたい。スウェーデンの学校には、文化祭などの学校行事はない。日本の学校では、「集団への所属感・連帯感」をかなり重視しているが、スウェーデンは、まず個人を重視する国であるため、このような違いが生じると考える。次に、部活動について述べたい。スウェーデンには、学校管理下にある部活動はない。しかし、地域にはスポーツクラブがある。地域の方が、ボランティアで、または給料をもらって指導している。

スウェーデンには、教員以外の専門スタッフが学校に常駐していることも日本との大きな違いである。専門スタッフが常駐しているため、教員は教科指導に専念することができる。

- ①システム担当
名票を作成する

- ②受付
教員や生徒の休みの連絡を受け、欠席した教員の代わりに入る教員を手配する
- ③テクニカルサポート
年度初めに新入生にパソコンを配布し、卒業する生徒のパソコンを回収する
パソコンに関する質問に答える
- ④進路相談
高校での履修相談、高校卒業後の進路についての相談を受ける
- ⑤カウンセラー
メンタルヘルス相談を受ける

実践的英語力を高める指導法

スウェーデンでは、年に一度、生徒の学習達成度を測るため、国のテストが実施される。英語のライティングでは、250語から600語のエッセイを80分で書く。

細かな文法のミスは気にせず、とにかく文章を読ませ、生徒に英語で意見交換をさせ、エッセイを書かせるなど、発信に特化した指導を行うことがスウェーデンの英語教育の特徴である。



ヴィスカストラズコミュニティー(高校)職員打ち合わせの様子

その鍵となるのは、生徒の興味を引く内容を、優しい英語で表している教科書であると感じた。

まとめ

- ①多忙化解消に向けて
スウェーデンの学校は、教員が教科指導に十分な力を注ぐことができるようになっている。日本の教員の多忙化解消に向けてまず必要なのは、学校行事、業務内容等の意義や内容の見直しを図ることではないか。その際、「集団」を意識した視点だけでなく、「個人」を意識した視点も必要であると考え。

- ②実践的英語力を高めるために
まず、スウェーデンの学校のように、適切な教科書を選ぶことが必須である。そして、シンプルにその教科書を使用して、英語の基礎基本を定着させること、生徒の発信に特化した指導を中心に授業を展開することが、実践的英語力を高める秘訣であると考え。



スペイン・エリクソンズコミュニティー(高校)インタビューに答えてくださった先生方

生徒が主体的、対話的で深い学びができる授業作り ～オランダのイエナプラン教育から学び合い学習を学ぶ～

静岡市立大里中学校 教諭 森 いずみ

研修の目的

新学習指導要領を受け、子どもたちがこれから生きていく中で求められる資質や能力を取得するためには主体的に学ぶ姿勢を習慣化しなければならない。そのためには、普段の学校教育から変えていかなければならず、教師が行う授業スタイルを「伝達型授業」から「協働型授業」に変換していくことが必要である。そこで、オランダの「イエナプラン教育」を知り、この教育実践こそが子どもたちの「主体的、対話的な学び」を促していると感じた。子どもたちがどのように課題を見つけ、子ども同士が関わり合っているのか現地で実際に見て学びたいと思い、今回の研修を志望した。

研修内容

オランダでは、イエナプラン教育を実践している小学校と中学校(高校)を1校ずつ、公立小学校を2校、そして学校運営管理会社を1社訪問した。

イエナプラン教育を実践している小学校では異学年の子どもたちで学級が編成され、それぞれの教室で学んでいた。学校での活動は「会話・遊び・仕事(学習)・催し」という4つの基本活動を循環的に行い、学校教育の中核として「ワールドオリエンテーション」が位置づけられており、教科別の学習をつなぎ、「学ぶことを学ぶ」ために

設けられた総合的な学習の時間を大切にしていることがわかった。子どもたちは「仕事(学習)」において1週間のスケジュールを自分で組み合わせて計画を立て、実践していた。なので、同じ教室にいてもやることは1人1人違って、パソコンで問題を解く子もいれば、友だちや先生と一緒に活動している子もいた。自分のやるべき仕事(学習)を自分で理解しており、自分の課題に向かって堂々と学習を進めている姿が印象的だった。

イエナプラン教育を実践している中高一貫校では、生徒たちとの懇談会に参加した。ここで驚いたことは生徒たちが自分の将来やりたいことについて明確な意思を持っており、そのために今の学習を頑張っているということ。堂々と話す生徒たちの姿勢だ。また、英語以外の授業もAll Englishで行うため英語の話す能力がとて高かった。これらの生徒からわかったことは、小学校の時から自分で学習内容を考え何のために学習するのかを考えなが

ら育ってきたため、その中で生まれた将来の夢や希望に向かって、生き生きと学校生活を送っているということであった。

研修を終えて

今回の研修で最も学んだことは、教師は単に子どもたちの学びのサポート役であり、彼らが自分の学びを計画・実践・ふり返しを行うことで学習意欲が高まり、その中で将来への希望を見いだしているということであった。そして、国家全体で様々な学習形態を尊重し、学習環境を整え目先の目標でなく常に未来を見据えた教育を実践している。このような異国の教育現場を視察させていただき、自分が今後どのような方向性をもって職務にあたるか考える良い機会となった。



小学校低学年算数の授業



幼稚園クラス授業ふり返りの様子